

がん研究奨励賞 (林原・山田賞)



中村 圭一郎

略 歴

昭和42年8月10日生	
平成6年3月	川崎医科大学卒業
平成6年5月	岡山大学医学部産婦人科入局
平成6年9月－7年8月	岡山赤十字病院勤務
平成7年9月－8年8月	倉敷成人病センター勤務
平成8年4月	岡山大学大学院入学
平成12年3月	岡山大学大学院修了
平成12年4月	岡山大学医学部附属病院医員勤務
平成12年5月－平成14年3月	Uniformed Services University of the Health Sciences にDoctor fellowとして留学
平成14年4月－9月	尾道市立市民病院勤務
平成14年10月	岡山大学病院助教（助手）
平成24年10月	岡山大学病院講師

研究論文内容要旨

1. The preoperative SUVmax is superior to ADCmin of the primary tumour as a predictor of disease recurrence and survival in patients with endometrial cancer.
2. The mean apparent diffusion coefficient value (ADCmean) on primary cervical cancer is a predictive marker for disease recurrence.

婦人科悪性腫瘍患者の診断には現在Computed Tomography (CT) やMagnetic Resonance Imaging (MRI) の形態学的診断が用いられ、進行期分類や治療法決定に役立てられている。さらに腫瘍の糖代謝を反映するPET/CT (Positron Emission Tomography: 陽電子放射断層撮影法) 検査や水分子拡散を反映するMRI拡散強調画像 (Diffusion-Weighted Imaging, DWI) の登場により、微小な病巣発見を把握するだけでなく、腫瘍病巣活動性定量化が可能となった。乳癌、頭頸部癌においてはPET/CT SUV max高値は予後不良因子であることが報告されているが、婦人科悪性腫瘍における腫瘍病巣活動性定量化と予後との関連は不明である。そこで根治治療が施行された婦人科悪性腫瘍を対象に、治療前PET/CT画像およびMRI拡散強調像を測定し、臨床病理学的因子と予後との関連を後方視的に検討した。

1. 根治治療を行った子宮体癌患者を対象にDWIのADCminとPET/CTのSUVmax測定し、Mann-Whitney U-test、Kaplan-Meier法や多変量分析を用い、統計学的な解析を行った。SUVmaxとADCminは負相関関係を認め、SUVmaxとADCminともにFIGO進行期、組織型、筋層浸潤、リンパ節転移、脈管浸潤、腫瘍径に有意な相関関係を示した。SUVmax高値症例は低値症例と比較し、無病生存率・全生存率ともに有意に予後不良であり、多変量解析においてもSUVmaxは無病生存・全生存の両者において、独立した予後不良因子であった。子宮体癌患者において、原発腫瘍SUVmaxが有効な予後指標マーカーに成りうることが示された。
2. 広汎性子宮全摘術を行った子宮頸癌を対象にMRIでの拡散強調画像係数である治療前原発巣ADCmax、ADCmean、ADCminを測定した。原発巣ADCmeanとADCminはFIGO進行期、間質浸潤、脈管浸潤、adjuvant療法間に有意な相関を認めた。再発について検討を行ったところ、原発巣ADCmean、ADCmin低値症例は高値症例よりも有意に再発を認め、多変量解析においては原発巣ADCmeanが独立した再発因子であった。子宮頸癌患者において、原発巣ADCmean 低値が再発の重要な前兆となる因子であることが示された。

原発腫瘍病巣活動性定量化であるPET/CT SUV maxおよびMRI拡散強調像ADC 値は、婦人科悪性腫瘍の予後指標マーカーとして有用であることが示唆された。